

望田幸男

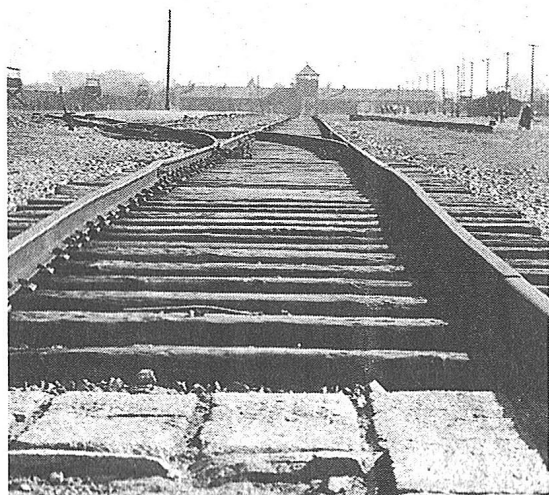
もう10年近く前になるが、友人・知人とともにアウシュヴィッツ収容所をはじめとしたポーランド旅行を試みた。その際、現地のポーランド人案内人が、ナチスによる占領時代の悲惨な体験を語りながらも、他方でのようにいった。「いまではドイツとドイツ人に怨念ありません。彼らとはフランス人やアメリカ人と同じようにつき合えます」と。

ポーランド人に 和解と許しの心

私は、過去の戦争における不法と残虐行為に対するドイツの反省と謝罪の積み重ねが、被害国民ポーランド人のなかに、このような和解と許しの心を生み出しているのか、と深い感動におそわれた。

ドイツとドイツ人によ

「過去を語り伝える文化の創造」 ドイツからどう学ぶ



ナチスがポーランドに建てたアウシュヴィッツ強制収容所・ビルケナウの中央に延びる鉄道の引き込み線。ここで降ろされたユダヤ人の多くがガス室へ。アウシュヴィッツでは、ユダヤ人110万人が殺されたといわれます。(大内田わか撮影)

るそうした数多くの積み重ねの事例を2、3挙げよう。はやくも1952年、フランス・西独などによって「ヨーロッパ石炭鉄鋼共同体」が発足した。これは石炭と鉄という戦略物資の生産などを国際管理することによって、戦争の物質的原因を除去することをめざした国際条約である。史上いくたびも戦火をまじえてきたフランス・ドイツ双方のまさに不戦の誓いが核心となっていた。この条約こそが、今日のヨーロッパ連合(EU)の最初の礎石となったのである。

ひたむきな反省 近隣国の信頼に

また西独首相ブラントが、ポーランドのユダヤ人犠牲者追悼記念碑を前に大地にひざまずいてドイツとドイツ人の「罪」

を謝罪したのは、1970年のことであった。また1985年の敗戦40周年にあたり、ヴァイツゼッカー大統領は国会で演説を行い、戦時中の「ドイツの罪」に対するひたむきな反省を吐露し、内外からの共感を呼んだ。

このような政治的パフォーマンスは、歴代の政治指導者たちによって継承され、近隣諸国の政治的信頼を深めさせてきた。こうした努力の総仕上げのように、2000年には戦時中の強制労働の被害者への補償を定めた「記憶・責任・未来」基金の設立が、全政党の同意のもとに成立した。

これら一連の積み重ねが、冒頭に紹介したポーランド人のドイツ人観に結実していると考えられる。そこにはドイツとドイツ人の政治的道義の到達度が示されている。それによってドイツは近隣

諸国と和解を進め、いま ではヨーロッパ連合の指 導国となっている。

橋下暴言を生む 政治道義の退廃

これに比して日本はどうであろうか。いまや北東アジアの孤児ともいえるべき状態に陥ってはいないだろうか。日本の歴代政府は、戦時の侵略と非人道的行為への反省を怠り、その責任をあいまいにし続けてきた。とりわけ昨今の安倍晋三首相の言動は、戦後秩序の逆転とも思える改憲思想を露骨に表明している。そこには政治的道義の退廃さえ感じさせるものがある。こうして行き着いた地

点が、従軍慰安婦問題にかんする橋下徹維新の会共同代表の発言である。ちなみにドイツでは、この種の暴言を発した場合には、国会議員であれ、大臣であれ、おそらく職にとどまることはできない。

戦時の非人道的行為や戦争犯罪の当事者たちが死に絶えようとしている今日、ドイツでは「過去を語り伝える文化の創造」という見地が強調されている。こうした道義的文化の大道を歩みつつあるドイツから、私たちがなにをどう学び、いかに行動すべきか問われている。

(もちだ・ゆきお 同志社大学名誉教授・ドイツ近現代史)